口蹄疫回想録（Ｈ２２）

都農町　　青 木 淳 一

4/ 7(水). 朝９時ごろ、親牛の熱が 40.3 度でえさ食べないと往診依頼。ＡＭ 11 時ごろ往診。口腔内に異常なく、実際に体温を測ってみると 39.3 度。
風邪にしてはちょっと違うな・・と思いながらもビクタス注射。

4/ 8(木). 15：02 往診。症状は昨日と変わらず、熱は平熱。ビクタス注射。左下顎のリンパ節が少し腫れていたため、流涎もあるし、放線菌も疑ってマイシリンも打った。

4/ 9(金). 16：30 往診。熱は平熱。食べない、よだれを流すということで、再び口腔内を診ると、上唇基部に直径３mm 程の潰瘍を認めた。その横に同じく３mm 程度の丘疹を認め、手でこすると脱落し潰瘍を形成した。舌には、先端部に２mm × ３cm の粘膜の脱落を認め、中央部は退色を認めた。見た瞬間、ドキッ！として口蹄疫が頭をよぎった。が・・・抗生剤を打って農場を出る。出たところで家保へ電話「3 日前に熱が 40 度以上あったけどすぐに下がった牛の口の中に小さな潰瘍があるんだけど・・・口蹄疫ではないと思うんですが、私は今後この牛をどう扱えばいいでしょうか？」と相談した。この牛の経過や、他の牛に症状はないのか？などを聞かれた。「しばらくしたら行って直接診るので場所を教えてくれ。」との事。「とても分かりづらい所なので、都農についたら電話もらえれば一緒に行きます。」と答え、「この後の往診は？」と聞くと、できるだけ行かずに、行くなら一度帰って着替えていってくれということだった。残っていた２件の農家には電話して、１件は様子見てもらうことにし、もう１件は病院に薬を取りに来てもらって、明日行くことにした。18:30 ごろ家保の方から電話があり、私が先導してＹさんの農場へ。病牛の、口の中、乳房、蹄、を念入りに確認されていた。結局病変は口の中だけだった。20:00 ごろまでかけて、全頭の口の中を確認し、他に異常牛がいないと分かると家保の人も安堵感からか、よく話をしてくれた。そして、「もしこれが疑わしいとなっていたら私達、今日はここで泊まらせてもらう所だったんですよ。」と家保の人が言うと、奥さんが、「布団はありますよ。」と答えたりして、みんなで談笑した。家保の人が、明日からもここに往診しますか？と聞かれたので、「はい」と答えると、「今後同様の症状の牛が出たときはすぐ連絡ください。また、ここへの往診は、一日の最後にしてください。」ということだった。この時点で私は、口蹄疫ではないと自分勝手に判断していた。何かのウィルス性疾患だろうとは思っていたが、家保の人に往診を最後にするように指導していただいていなければ、翌日からは普通に往診して他農場に感染を広げていたはずで、ゾッとするとともに家保の人から指導していただいたことに感謝している。

4/10(土). 少しずつ食べだした。「よかったですね。」と話して、牛にほとんど触らないようにしてマイシリン注射。

4/11(日)～4/12(月). マイシリン注射だけで、ほとんど食欲回復したため様子見にした。4/15 までは何事もなく、忘れていた。

4/16(金). 他の牛で同じように、よだれ流して熱があって食べない牛がいると電話があった。一番最後に行くから午後になるよと伝えた。16:30 ごろ家保に連絡すると、牛を見たらどんな様子か連絡くださいとのことだった。17:12 到着。熱 39.3 度。朝は 40 度以上あったとのこと。口腔内異常なし。口蹄疫ではないと思い込んでいたので、抗生剤を注射して「何らかのウイルス伝染病でしょう。」と話した。その場で家

保に電話して症状を伝えると、「他にはいないか？」との事だったので見て回ると、えさは食べているけど、流涎の牛が1頭見つかった。やはり口腔内異常なし。その3頭は放牧しないようにとのことだった。手と体温計、長靴は消毒液で洗ってから帰る。

4/17(土). 奥さんから「昨日は、よだれだけだった牛が今日は食べなくなった(熱41度5分)」。と電話が入った。行く前15時ごろに家保に電話すると既に昼間診に行ったという事だった。そして、「農家さんに、他の牛と接触しないよう放牧しないように念を押しといてください、農家さんが不安だろうから何のウイルスかはっきりさせましょう、と伝えてください。」と言われた。なるだけ牛と接触しないようにしながら2頭に抗生剤投与。家保が、消毒液ビルコンSを農家に渡していたので、ビルコンで手と体温計、長靴を消毒して帰る。

4/18(日). 13:30この日最後の往診。１６日によだれだけだった牛、熱39.8度。あまり触らないように2頭に抗生剤投与。ビルコンで消毒して帰る。

4/19（月）この日は、異常産の予防注射の為、ＡＭ８時過ぎからは役場の職員と都農の農家を回っていた。そうするとＡＭ11時ごろ、あと２～３件で午前の訪問農家が終わるという時に、家保から連絡があった。「先日のＹ農家さんの検査で、口蹄疫が否定できないので、これからの往診は控えてください。」「え？今異常産の予防注射に回っていて、今日一日スケジュール組んであるので無理ですよ。」「しかし、なるだけ不要不急の農家への往診は避けてください。」「いまさら、予防注射キャンセルはできんでしょう・・」というような押し問答をしていると上司らしき人が電話に出て、「一応念のための措置です。検査結果は今夜遅くに出る予定なので、とりあえず今日これから半日だけの対応をしていただけないでしょうか？絶対に往診してはいけないということではありません。そしてこのことは、絶対に誰にも話さないで下さい。」ということだった。午後からの注射を共済獣医の方に代わってもらうべく、川南共済に連絡し共済の先生に代わっていただいた。この時点でも私は、口蹄疫ではないと信じ込んでいた。

4/２０(火)朝７：４５この日も、異常産の注射で回る予定だったので、それまでに前日の下痢の症状の重かった２件の往診を済ませておくつもりで早めに往診していると、ちょうど子牛に静脈注射している最中に家保からの携帯がなった。イヤホンマイクで注射しながら電話に出ると「検査の結果が出ました。陽性でした。〇〇時から大臣会見です。」「・・え？・・えっと・・クロですか？」「・・はい。クロです。もう往診には出ないで下さい。」と言われたが、「今もう往診中です。」と答えると、「えっ！それでは、もうすぐに往診中止して、午前中にうちの職員が往診記録を見せてもらいに伺いますので、待機しておいてください。」とのことだった。いそいそと「失礼します。」とだけ言ってその農家を後にした。それから、もう一件行く予定のところにいけなくなったと伝えて、役場の職員と、ＪＡの畜産課課長と、共済の川南所長と、獣医師会児湯支部の支部長に陽性であったことを連絡した。児湯支部長に私は、「口蹄疫でも、その農場はすごい山奥で隔離するには絶好の場所です。」と、この農家がほんとの１例目だと思っていたので、あわてることはないという意味で報告した。つまり、この時点では口蹄疫だったことに驚きはあったものの、絶望感のようなものはなく、いくらか騒ぎになっても、しばらくしておさまればまた元に戻ると思っていた。10時ごろ、家保の二人(私より若い男性と女性)職員が到着して、4月1日からの往診記録と、農場の住所・電話番号を調べ始めた。調べながら、女性職員は、「ほんとに早い通報で助かりました。」とおっしゃっていた。また私は、励ます意味もあって男性職員に「ここが腕の見せ所ですね。そう思ってしないとつぶれますよね。」と話した。午後二時ごろには全ての作業が終わり、このあとは、Ｙ農場が飼料を購入していた会社の台帳を挙げに行くとおっしゃっていた。この日の夕方、児湯支部長から電話で、「実は、青木君にいわれるまで思いもしなかったけど、俺もよだれ流してえさ食べない牛を診てるのよ。その牛は歯が抜けてたからそのせいだと思って診てたんだけど。」とおっしゃるので「それは、口蹄疫ですよ。す

ぐ家保に連絡したほうがいいです。」と言うと、「もう、した。今日採材してるはず。」ということだった。

4/21(水)朝のうちに、川南共済の所長と電話して話した。そのとき所長が「実は、青木君に言われて思ったんだけど、うちも似たような牛を診てたんだよね。」「えっ！」「もう、家保に連絡してあるけど。」・・・驚きとともに、これは同時多発だと思った。その夜、児湯支部長から、「陽性だった。」と連絡を受けた。

4/22(木)朝、新聞に、２例目３例目のＰＣＲ陽性の記事を見て、急に恐ろしくなった。陽性であることは昨日の夜に知ってはいたが、記事になって、でかでかと載ると急にある心配が頭に浮かんだからだ。もしかして、感染源が輸入ワラだったり、黄砂だったりしたら県内いたるところで、いや日本中に同じように気づかれないで治療し続けている口蹄疫がいるんじゃないだろうか？あんなに軽い症状なら見落としていても不思議ではない－そう思い、動揺し慌てたままで、自分の一頭目の臨床経過を殴り書きで書いた。そうして、児湯支部長にＦＡＸして、会員に流してもらえないか頼んだ。すると、すぐ30分ぐらいで我が家にも、活字化されたその臨床経過のＦＡＸが送られてきた。そこで、もう一度児湯支部長に電話して、県の獣医師会を通して、県下の各支部と、日本獣医師会から全国の獣医師にもこれを流したいと伝えると、県の獣医師会の事務局長を紹介してもらうことが出来た。時系列に分かりやすく書き直した臨床経過の文書は、この日のうちに、県の各支部長と、日本獣医師会へ送られた。ここまで終わると少しほっとした。

4/24(土)以前診ていた子牛がぐったりしてるから診て欲しいという依頼の電話があったが、自分はいけないので、共済に頼んでみますと説明し、共済の先生に防護服を着て行っていただいた。

4/26(月)獣医師会児湯支部として会員の往診の完全停止決定のFAXが届き、電話で支部長と話す。「青木君、共済に往診頼んだやろ。駄目よ、共済も一緒よ、会員は往診はしないということで、意思統一するから。」しかし、私は農家がいちばん不安で頼りたい今、往診しないことは見捨てられたという思いを強くさせてしまうと思った。そして、行けば助かるが、行かなければ死んでしまうような急患の往診依頼は、厳重な防疫行動をマニュアル化して、会員が同じ行動をとるようにして行くべきだと思ったので支部長にこう言った。「難産の時に獣医が来てくれないから農家同士や、JAの職員に頼んだりしてるようです。そこで感染が広がったら、頼まれた人の責任になって、より混乱してしまいます。だったら、獣医がプロの消毒をして向かうべきなんじゃないでしょうか？」「うーん、そうなんだけど、もし獣医が感染広げてるという疑惑をもたれるとまずい。会長は、会員の立場を守らないといけない。」と言うような話をずいぶんして、結局、感染が下火になって新たな感染が確認されないようになって何日間かしたらすぐに往診再開できるように、防護服の備蓄と、往診のマニュアルの作成はしておこうということになった。私は、どんな感染拡大の爆心地だろうときちんとした防疫行動に従って往診すれば感染拡大させることは無いと思っていたので、はがゆかったが、新たな感染が下火になることをただ祈った。4月28.29日の２日間で、３件の難産の依頼の電話があった。無事生まれたのは一頭だけだった。死産だった農家さんが結果を電話で話してくれる時も、決して私を攻めることなく、「また、お世話になるようになる時はよろしく頼みます。」と言って頂き有り難かった。しかし、とてもつらく申し訳ない思いでいっぱいで、この後も病畜が死んだという電話でお礼を言われたときには涙をこらえるのが難しかった。そして死亡した牛を、移動制限区域内は移動できず、埋めることも許されずにそのままになっていることも、事態の悲惨さをなおつらいものにしていた。支部長は、「たった、一週間でみんなヒンダレてしもうたじゃない。」と言って嘆いておられた。そして、こういうことが起こっているということの報道が無く、「何例目の発生です。」という発表だけだったので、「児湯は見捨てられた。」「自分たちだけで何とかしないといけない。」という悲壮感に拍車をかけた。時の赤松農水大臣が「移動制限区域内に発生を閉じ込めることが出来ている。」というような、現状を評価するような発言をしたときは、「現場の事、口蹄疫のこと何も分かってないようだから、感染した牛豚をトラックに積んで、国会議事堂の前までキャラバンしようか。」と思ったほどだった。

～～4/20以降、5月中ごろまでで外出は、連休中に夜の9時ごろに嫁が心配して日向の太平洋ドライブインまで連れ出してくれた一度だけだった。この頃は、日々感染拡大を、報道で見ているだけで何もできないつらさの中にいた。～～

5/13(木)都農町内の農家から電話で、「親牛が様子がおかしいので先生から見て欲しい。」と相談を受けた。「今往診が禁止されている。」と伝え、もし口蹄疫ならこういう症状が出ます。と一通り説明すると、絶句してしばらくしてから「じゃ家畜保健所に来てもらったほうがいいですね。」と言うので、間違いないと思った。このときまだ都農での発生は、1例目と6例目の水牛を除けば、瓜生地区の2件だけだった。しかもこの農場は、瓜生からだいぶ離れた農場だったので、早く確定して防疫行動に移らないといけないと思い、私も家保に連絡して直接お願いした。

5/14～5/16まで、13日の農場の発生の発表が無かったため、シロだったんだなと胸をなでおろし、17日の朝、当農家に電話すると、「今から、殺処分です。」という返事だった。「えっ？13日に通報したんでしょ？」と言うと、「ええ、でもよだれと食欲不振だけで、口や鼻の中に何も出来てないなら、しばらく様子を見てて、何かできたらそのとき電話くださいということだったので、口に異常が出た15日に来てもらいました。」という返事だった。にわかには信じられず愕然としてしまった。発生が次々起こっている川南の爆心地ならそういう対応もやむを得ないが、まだ発生の無いこの地域でその対応なら、経過観察中に感染を拡大させてしまう。そう思って、すぐ家保に電話し、経過観察であっても農家には「それは口蹄疫だけど、はっきり症状が出ないと検査しても引っかからないから、今とっても忙しいから申し訳ないが症状がはっきりするまで待ってほしい」と、そういう説明をして、発生農家と同じと見なして欲しいとお願いした。そして、経過観察になった時点で、町に連絡して、各役場がすぐ防疫行動に移れるようにして欲しいとお願いした。

5/19(水)前夜の18日夜に、赤松大臣がワクチン接種の判断を下していた。しかも１０～２０ｋｍの区域は、早期出荷で空白地帯を作るということだった。その早期出荷の肉は全て政府が買い取るということだったのに、一日たつと、やっぱり流通させると言い出した。ワクチン接種後の飛び火の危険を考えたら絶対に流通させてはならないと思い、いろんな人へ電話して何とか食い止めないといけないと話した。

5/20(木)殺処分に出て人手がなくなった共済の先生の代わりに、JAで治療薬を農家に手渡しする作業に出て行く。そこでJAの畜産課長から、「ワクチン接種の報道以降、農家のやる気がなくなって、消毒しないという風になっている、保障の事が全く出てきてないのでみんな不安。消毒薬取りに来る農家が半減した。」と聞いて「何とかしなければ・・ワクチン打っても消毒しないといけないことをうまく説明して伝えなければ・・」と思った。

5/21(金)ＴＢＳの方から電話があり、ニュース23に出て1例目の経緯を話して欲しいということだった。ちょうどこの日、子供が下校時に友達から「口蹄疫マン」と言ってからかわれて泣いて帰ってきたこともあり、「今それどころじゃない。」と一度断ったが、今の農家の置かれている苦しい立場(保障の話が決まらないままでは、ワクチン打って殺処分する方針には同意できない事)についても放送するという条件で引き受けた。1時間30分近くのインタビューだった。編集に当たっては、今の農家の立場の説明の所と、農家に対して申し訳ないと謝る場面は切らないで欲しいと伝えた。なぜ謝ったかというのは、こういう結果になってしまったことに対しては、獣医業界の準備不足にも責任があることだと思っていたし、何より、何もかも失ってしまう農家にばかり大変なことを押し付けている現状では、誰かが頭を下げなければ、農家の心情としてこれから協力してこのウイルス封じ込めをしようという気にならないだろうと思っていたからです。

5/24(月)都農町でのワクチン接種始まる。

5/25(火) この日、私も始めて２件の和牛繁殖農家へワクチン接種した。非常に緊張した。子牛検査でよく行くところだったが、同じワクチンでも意味が全く違うことに、畜主になんと声をかけていいのか分からず。ただ「お願いします。ワクチン打たせていただきます。」と頭を下げた。この夜、急遽、町内全ての牛の農家に「明日ワクチン打ちに行くことになったので同意をお願いします」という電話を役場ですることになった。職員の方が何人もと、町長自らも電話をかけていた。私は、詳しい説明を求める農家への説明や、同意を渋る農家の説得に当たった。

5/26(水) この日一日で都農の牛全てを一気にワクチン接種する予定だった。13？班に分かれて私も役場の職員と、県外からの獣医さんと回った。作業そのものには慣れたお昼前ごろ、ある農家の子牛が運動場を逃げ回ってなかなか捕まらなかった。みんなで追い掛け回してすみに追いやっていると、その農家の娘さんが棒を持って追いかけながら泣いておられた。それを見て「農家にこんな思いをさせるために獣医になったのでも、こんなワクチン打つために獣医の技術を培ってきたのでもない。」という思いが一気に涙とともにあふれて止まらなくなってしまった。それを見た役場の職員も「青木先生が泣くもんやから俺も泣いてしもたじゃない。」と言っていた。結局１件の農家が接種に不同意で、そこの説得に夕方行った。いつも治療に行くよく知った農家だった。「もう年だから、ここで牛を全部殺処分して、またやり直すようなことはできない。」ということだった。今日は無理に説得しなくていいと考えていたので、話を聞いて、一応の説明だけして、また考えておいてくださいと頭を下げて帰った。

5/27(木) 昨日のワクチン不同意の農家から病院に電話があり、「ワクチン打ちます。」と連絡があった。すぐ役場の職員と行って打った。その時農家のじっちゃんが、ある牛を指差して「この牛は、そろそろ予定日が来ちょっとやけど忠富士やから心配なっつよな。」とお産を心配されていた。ワクチン接種後には急患のみ往診再開すると言う方針を聞いていたので、「今日から急患は往診できるから。」と言っておいた。すると、その夜お産が始まったので来て欲しいと電話があり、往診して娩出させた。元気に生まれた子牛を見て「この子牛にもワクチン打たんといかんとですか？」「いやいいですよ。」「そうですか・・結局殺されるんだけど・・・でも、無事に生まれてくれてよかった。ありがとうございました。」とお礼を言って頂いた。いつもなら“無事生まれてよかったですね”と言うところだが、良かったと言い切れない複雑な感情だった。でも、そこで見た子牛をなめる母牛の姿や、生まれてすぐ何度も立とうとしている子牛の姿は、いつもと変わらない命の輝きで満たされていた。

5/30(日)～6/5(土) にかけて、ヤギ、ミニ豚にワクチン接種。ヤギの畜主の中には、家族のようにかわいがってらっしゃる方もいらした。数ヶ月前に私が治療して元気になったヤギにも当然ワクチンを打った。本当のとばっちりのようなことで殺される運命になったことに、やりきれない思いだった。この頃は、一日一度は涙を流していたような気がする。

６月の始めごろ、知事が経営再開の目標を８月中旬頃にするというような記事が出た。あまりに早い再開計画に、あぜんとした。何とかウイルスが怖くて再開が怖いという現場農家の気持ちが、県に伝わらないものかと思った。(後でひとづてに県の職員の話として、「殺処分などの現場の人にゴールを見せて、元気になって欲しいと言う意味合いが強かった」ということを聞いた。)

6/9(水) 夜、「高崎で (口蹄疫が) 出た。」と報道関係者から連絡が入った。「みんなパニック状態なんですけど、どう考えたらいいでしょうか？」と言われるので、「飛び火は想定内の出来事なので、えびの方式で消し止めればいい。ただ、ワクチン接種がいけなかったと言う議論にしてしまうといけない。ワクチンのおかげで発症は止まっているので、効果はあった。もしワクチン打ってなければ、もっとひどい事になっていたはず。」といろんな報道関係者に話した。飛び火が怖いと思っていたが、実際に起こった事で自分自身も動揺していた。これからどうなっていくのか分からない不安はあったが、せめて人間同士の不和が

起こらないようにと祈るだけだった。かつて、子供が友達から口蹄疫の事でからかわれたこともあったので、自分に出来ることは、しっかり子供を見て、話を聞いてやって、大人の世界の都合で子供がないがしろにならないように気をつけようと思った。

6月下旬になると、都農でもワクチン接種牛がどんどん殺処分されていった。「殺処分に手が必要ならいつでも呼んでね」と役場の担当者に言っておいたが、結局要請は無く、殺処分には全くでなかった。この頃、「殺処分場までの輸送中に産気付くと“のさん”から、注射で生ませてやりたい。」と何軒かの農家が分娩促進剤の注射を依頼してきた。農家の方がそう望むのであればと、注射を出した。出来るだけ、農家の方に後悔が残らないようにと思っていた。ある農家には、「あさって殺されるけど、弱らせたくないから」ということで、下痢してフラフラしている2日後には殺される子牛に補液をしに往診したりもした。

7月に入り、児湯に全く牛豚がいなくなってから、何人かの畜産関係者とあって話したが、後ろめたさを感じている人や、とにかく疲れている方など、何かしらつらさが感じ取れた。普通にしていても、「何もすること無いといけませんねぇ。」と、世間話のつもりで話しても涙ぐまれる方や、私の顔を見るなり泣き出された方もいた。「がんばろう宮崎という張り紙見るのが“のさん”。」といわれた農家の奥さんもいた。何か、お互いが心を通わせて、自分の思いを整理したり吐き出したりする事が出来る場が作れないものかと思った。